

## 奇跡は起こすもの

「奇跡は起きるものじゃない 起こすものなんだと だから望みを懸けるのさ 夢見る心閉じないで・・・」これはフォークデュオ コブクロの最新シングル曲「奇跡」の歌詞の一部です。7月19日に京セラドーム大阪でKOBUKURO LIVE TOUR 2015「奇跡」を観ました。

開演は冒頭のタイトル曲から始まり、途中のMC(曲の合間のお話)で、「奇跡は皆さんすでに起こしているんですよ。この世に生まれてくるということはすごい確率なのでそれこそが奇跡なんです」という話が印象に残っています。実際の確立についてネットで調べてみましたが、諸説あり、天文学的な数字が並んでいます。確かに両親が会う確立だけでも凄い確率なのに、受精云々となるとそうなるのかもしれませんが。

コブクロは売れる前は路上ライブをよくしていました。私の事務所の近くの天王寺MIO前や難波のひっかけ橋などで、路上ライブは道路を占有するので警備員さんから注意を受けるとわかっていながら注意されるまでライブを行い、注意されると別の場所に移動してまた行く。お金がないので車も路上駐車、ガソリンも500円だけ入れてもらうとか、当時の苦労話もMCで披露していました。

コブクロのファンに対するサービス精神は旺盛で、路上ライブで苦労していたときからのたたき上げなので今も変わらず謙虚です。ボーカルの黒田さん(左の背の高い方)の身体を曲げながら声を振り絞る姿は路上ライブの時と何ら変わっていないそうです。アカペラでも充分聴かせる歌唱力は正に実力派です。現状に満足せず更なる飛躍を目指していることもMCで語りました。MCでの二人の掛け合い漫才のような息の合ったトークと小淵さん(右側の背の低いギターを持っている人)の悲しい実話、笑いあり涙あり、これがコブクロのライブの魅力なんだと、又行きたいですね。リピーターが多いのが良く分かります。それに、この二人が堺市の堺東銀座通り商店街で出会ったことこそが奇跡に違いありません。

「甲子園球場に奇跡は生きています！」このフレーズだけでピンとくる人は相当な高校野球ファンです。今年で100年目を迎える高校野球の全国大会。その長い歴史の中でも「最高試合」と今も語り草になっている1979(昭和54)年8月16日の3回戦、箕島高校 対 星稜高校の延長18回にも及ぶ名勝負での出来ごとでした。当時の植草貞夫アナウンサーの名調子です。

1対1のまま延長戦になり、延長12回の表 星稜が1点を入れその裏の箕島の攻撃は2アウトランナーなし。箕島の尾藤監督は敗戦後のインタビューのコメントを考えていたという。しかし、次の打者嶋田がベンチ前でいきなり「監督！僕ホームラン狙ってもいいでしょうか！」という言葉を残し、そのまま打席に立って2球目を予告ホームラン。土壇場で同点に。さらに、延長16回表 星稜が1点を入れ、その裏箕島の攻撃は2アウトランナーなし。2年生の森川への初球は一塁へのファールフライ、これで万事休すかと思われたがここで問題のシーン、一塁手の加藤が人工芝に足を取られまさかの転倒。その直後に森川がレフトへのホームラン。この時に放たれた言葉が上記「甲子園球場に奇跡は生きています！」でした。結局延長18回の裏 箕島がヒットで1点を入れ4対3で箕島がサヨナラ勝利。そのままの勢いで箕島が春夏連覇を飾りました。決してまぐれではない、日頃の厳しい練習で鍛えた技術と精神力、それにピンチでも動じないよう「尾藤スマイル」がこのような奇跡を起こしたのかも知れません。

ネットでこのようなコラムがありました。「あなたは“ありがとう”の反対を知ってますか!？」答えは「あたりまえ」。「ありがとう」は漢字で「有難う」「有難(ありがた)し」という意味で、あることがむずかしい、まれである。めったにない事にめぐりあう。すなわち、奇跡ということで、奇跡の反対は、「当然」とか「当たり前」。我々は、毎日起こる出来事を、当たり前だと思って過ごしている。「有ること難し」生きて、出逢う、という奇跡の連続に、「ありがとう」を言わずにいられない。と括弧しています。

人は60兆個もの細胞でできています。それらが複雑に伝達しあって超精密に一日24時間一年365日そして生涯、狂うことなく機能し稼働し続けていること事態が奇跡といえなくもありません。日々生きていることに感謝し、奇跡につながるかもしれない出逢いを大切に今後も精進していきたいと改めて感じております。